

研究



再び共榮圈内の經濟狀況と交通問題 (中)

H T 生

|| 印度について ||

ガンヂー曰く「英國よ印度に相談あれば先づ英國が過去の罪惡を告白せよ」……これがガンヂーの英國に放された第一聲である。這般足搔きにも似た英國政府の改組に國運尙書に返咲いたクリツプスに轟々たる國內國外の褒貶のうち最初に彼れに與へられた仕事は印度の懐柔であつた。欺瞞術數を行ふにあつた。然るに印度はその手には乘らず

して英印交渉は決裂の結果を見たが彼れクリツプスは印度を去るに當つて、その經過を述べてゐるうちに英印の將來に對する示唆が含有されてゐるのを見るが、果して英印關係が今後どう發展するか極めて興味ある問題である。英國は既に交渉が決裂して近く收拾の見込みがないとすれば高壓的態度をとるに至るであらうとは一般的に考へられるところであるが、それが果して現在の英國には爲し得るや否や全く疑問である。這般我が精銳なる海軍機動部隊が印度

洋、セイロン島を始めマールラス、ウイザガバタム、コカナダ、カルカツタ方面に於て英の甲巡二隻空母一隻を始め多數の武装商船並に驅逐艦哨戒艇を撃沈し、また更に敵が世界に誇る電撃機スオード、フィッツユ以下、スピットファイヤー、ハリケン、デファイアント戦闘機等新鋭機を多量に撃墜、更に敵軍事基地を徹底的に爆砕し實にハワイ、マレー兩海戦に匹敵する赫々たる大戦果を擧げて、こゝに英國印度洋艦隊並に航空勢力は殆ど全滅してベンガル灣を中心に印度洋上には今や敵影なく印度洋東部は完全に我れに掌握されるに至つたので、異常の發憤を印度民衆に與へたことは英國をして益々印度懷柔の至難なるを思はしむるのである。……印度人の印度を再建することは吾等は我國民と共に念願してゐるところであるから印度國民會議派及び

其他の各黨派も我方の眞意……最高方針而して我國民的感情を正解すること肝要である。替言すれば英國國運の將來に正確なる見解を付けることが何よりも肝要である。興隆國家と衰退國家との比較研究は異日を待つ必要なく眼前

に相次いで起る多くの實地教訓がこれを明示してゐるのである。こゝに開眼し徹底すれば印度の將來進路は坦々として開かれるのである。

顧みれば英國の印度擄取は西紀千六百年に東印度會社が創立されたときから始まるのであるが、この擄取の上に掠奪、虐殺、脅迫など非人道の限りを盡したのは千七百四十五年に僅かに十八歳の少年ロバート・クライブが東印度會社の一書記としてマドラスに到着してから本格的なり、その後繼者たるウォーレン・ヘイスチングに依つて千七百三十二年から同千八百十八年時代に全印度は完全に英國の虐取下に入つたのである、後で二人とも軍人に轉向してクライブはベルガルの初代總督となり、ヘイスチングは全印度の初代總督となつたが、二人とも全印度の民衆をして恐怖服従せしむることに成功したのであつた。これから約百九十年間印度は現在まで英帝國の掠奪と虐殺と擄取に呻吟しつづけて來たのであつた。

全體この雄大豪壯なる國土……印度といふところは、北

緯八度五分のコモリン岬から三十七度のヒマラヤ山地、東經六十一度のベルチスタンから九十七度のアツサムに互る廣大なる地域を占めて居り、東西南北ともに延長實に二千哩である、而してその絶對的の大部分は英國の植民地となつてゐる、又ビルマ及びセイロンは何れも英國の植民地であるが行政上は印度から分離されてゐる、印度の總面積は百五十五萬平方哩で蘇聯を除いた全歐洲の面積に略々匹敵してゐる、即ち我が日本全領土の約六倍、英本國の二十倍に相當するのである、而して國境線は一萬千哩の長さに達してゐるが内五千哩は海岸線である、重要都市の距離を見ると、ボンベイ、ペシヤワル間は千五百哩、ペシヤワル、カルカッタ間は千五百哩、ボンベイ、カルカッタ間は千二百哩、デリー、ボンベイ間は九百五十哩、デリー、カルカッタ間は九百哩、ボンベイ、カラチ間千哩、ボンベイ・マドラス間は千五百哩で殆んど一千哩を單位として重要都市が散在してゐる状態である。

印度の地勢はヒマラヤの山地、インダス・ガンヂスの平

野とデツカンの高原であるが、この國の北境を劃するヒマラヤは延長實に千五百哩、幅二百哩に達して平均高度は實に二萬呎以上であり、その背後にはトランス、ヒマラヤがあつて、西方には世界の屋根といはるゝ彼のパミール高原から分岐するカラコルム大山脈が連互してゐるのである。ヒマラヤには標高八千八百八十二米で世界最高峰と稱せられてゐる、かのエヴェレストを始め八千米級の高峰は十に近くもあり、又七千米以上のものに至つては實に五十以上を數へられる雄大なる威容を呈してゐる、このヒマラヤ山麓地方一帶には高度の關係で熱帶温帶の植物が生育し十月頃にはこれ等春夏秋の草花は百花爛漫一時に咲き揃ひ時ならぬ春を物出するのである、ことに面白いのは十月頃でなくては櫻が咲かないので、秋櫻の風情は印度でなくては味へない異趣である、インダス・ガンヂスの平野にはヒマラヤ山地とデツカン高原との間に横はる沃野であるが東西の延長千五百哩、幅百五十乃至二百哩に達してゐる、東はベシヤワルから西はアラビヤ海にたらなる頗る廣大なる地域

である、ヒマラヤに源を發するガンヂス・インダス・プラマプトラの三大河川がこの大平野を貫流してゐる、殊にガンヂス河はその流域面積實に百七十三萬平方キロに達してこの國に於ける最も豐饒なる農耕として穀倉を形成してゐる。人口の如きもこの流域附近が最も稠密で一億に近いのである、これを支那揚子江流域の面積百七十七萬五千平方

キロに比すると殆んど變らないのである、又英國は最近に至つてインダス河流を利用して頗る大規模の灌漑工事を起してゐるが、即ちシンド州では四百三十萬エーカー及びパシヤ州では千百萬エーカーの不毛地帯が耕作地と變じて主として棉花、小麥等を生産するに至つてゐる。デツカンの高原は印度半島を占めてゐる三角形の高臺地である、北方はヴィンディヤ山脈、東西はガーツ山脈によつて圍繞せられてゐるがその標高は三百乃至九百米である。而して西北部は廣大なる玄武岩の熔岩臺地を形成して壯觀であるがこの地方は棉花と木材を産出するのである。

大體印度の全貌はこの位にして本題の中軸たる産業經濟

問題を見ると、元來印度は英帝國の寶庫と稱せられ又イギリスの王冠に鑲められたる最も光輝ある寶石とも云はれてゐる位であるから従つて英國の發展は主として印度收奪の基礎の上に築かれてゐると云つても敢へて過言ではないのである嘗て印度の大多數黨たる國民會議派が。

英國は地稅を高くして農民を貧困化たらしめ、鐵道運費を高くしてその産業開發を妨げ、自由貿易政策の美名の下に印度の綿業を壓迫し、印度は自ら飢ゆるに拘らず、その穀物を輸出し、資源の調査開發を怠り、只だ單に印度より財政的貢獻を搾取するのみである。

と云つてゐるが、誠にその通りであつて、比類なき英國の繁榮と逆行して限りなき印度人の窮乏との結果これを如實に物語つてゐるのである、印度はその尨大なる人口の約九割が農村に居住してその内の約七割が農業に依存して生活してゐる關係上基本産業は農業である。これを世界の産額に比較して數字的に觀察するも全く世界的屈指の大農業國である。

印度農産額と世界の比較

米	二、六七三萬噸二位	小麥	一、〇七九萬噸四位
大麥	二三〇萬噸五位	棉花	五六六萬噸二位
甘蔗	五三〇萬噸一位	黃麻	八六五萬噸一位
煙草	五〇萬噸二位	棉子	二四〇萬噸二位
亞麻	四六萬噸三位	芥子	二〇二萬噸二位
胡麻子	四四萬噸二位	落花生	三三四萬噸一位
茶	四億三千萬封度二位	ゴム	三千二百萬封度七位

と云ふ割合を占めてゐる。千九百三十七年度……八年度の統計に依る。其他豆類三百五十萬噸、玉蜀黍二百萬噸、粟七百萬噸、珈琲一萬噸、及びコブラ、阿片、藍香料等々が産出するのである、又印度の畜産も世界屈指と云はれる程であつて、家畜は牛一億六千萬頭で全世界の三分の一を持つてゐる、又山羊は三千六百萬頭で世界の第一位を保有しその他水牛三千百萬頭、羊千五百萬頭、馬四百萬頭、駱駝五十萬頭に上つてゐる、これを見ても農業的環境を喪失したる英國にとつては印度は如何に大切なる寶庫であるかは首肯されるのである、又印度は森林にも非常に恵まれてゐて、

白檀、チークの如き有用材が一ヶ年に木材一億噸の採取は容易である。

更に印度の工業及び鑛業に至つては、印度は二十世紀に入るまでは單に英國の製品販賣市場として又原料の供給地として全然英本國に從屬してゐたのであつたが、第一次歐洲大戰の勃發は圖らずも印度の工業に一大變革をなさしめたのであつた、即ち大戰によつて英國の對印物資の供給は杜絶して之れに替るに我國米國からの輸入は激増して英國の利益は著しく激減したのみならず、印度は軍需基地としての重要性が改めて認識された結果、こゝに印度政府は從來の自由放任主義を一擲して、俄かに印度工業の自主的發達保護の積極政策に轉回するに至つたのである、かやうにして印度の工業もその發展の基礎を有して遅々たるも印度資本主義の進展を見たのであるが、更に今次の世界大戰勃發と共に印度工業化の必要は一層深く認識さるゝに至り、現に印度政府は全力を盡して工業、就中軍需工業の發達を圖つて兵器部門は勿論、自動車、航空機、造船工業等の重

工業も漸次その緒につくに至つてゐる。

併乍ら現在印度の工業中に於て最も發達してゐるものは何んと云つても綿工業である。

工場數 三百八十九工場 紡機 千五萬九千鍾
 織機 二十萬二千餘臺 雇傭労働者數 四十四萬千餘名
 棉花消費高 三百八十一萬俵
 綿布生産高 四十二億六千九百萬碼
 綿糸生産高 十三億三百萬封度

これは一九三九年度の統計であるが、この印度の綿工業の發達は曩の世界大戰勃發による世界的好況と新經濟政策とによつて異常の躍進を遂げた結果である、しかもその拂込資本の總額は約四億留比にて世界第七位の綿業國たるに至つてゐる、而して印度綿工業資本の約九十五%は印度人の所有である、この點に於て最も重要な印度國民産業たるの實質を備へてゐると同時に英國資本主義と全然對立の關係に立つてゐる、これが政治的に對英抗争と相並んで印度の將來に重大なる意義と役割を持つことは大東亞戰爭の益々擴大に連れて大に注目すべきことである、又黃麻工業

は現在の印度に於ては綿工業に次ぐ重要工業となつてゐるが、これ迄大部分は英人の經營であつたが最近ではその約六〇%は印度人の手に歸して製品の殆んど全部は輸出されてゐる、尙ほ他の主なる工業を見ると。

種別	工場數	就業労働者數
製茶	一、〇二五	六三、四六〇
精米	一、八一三	八二、五一一
砂糖	一九六	七七、四七九
皮革	三八	八、九九四
オイル	二五九	一四、〇四三
毛織物	一三	六、九二一
絹織物	四一	二、三三四
製紙	一〇	七、六〇一
煉瓦、タイル	八三	一〇、八六六
煙草	二七	九、三三二
電力	一三一	一一、九六〇
機械	三四八	四二、二二六
自動車、車體製造	八七	六、一三一
鐵道、電車	一七三	一〇八、七〇三

となつてゐる、「一九三六年度の印度政廳統計に依る」譯て

鑛業方面を見ると、元來印度の鑛業は未だ充分に開發されてゐないために従つて現在尙ほその發達は遅れてゐるが、夫れでも金は三十三萬オンス、銀は五百九十七萬オンス、銅は一萬噸を産し雲母の如きは世界總産額の約三分の一を占めてゐる。又石炭は主として、ビハル、ベンガル州に産して、その従業労働者数は十六萬餘人、埋藏量は深度千呎を限度として約六百億噸と推算されてゐる。鐵もまた、ビハル、ベンガル、マドラス等を主産地として原鑛埋藏量は三十億噸と見積られてゐるが、製鐵製鋼は近年相當の發達をしてゐる、即ちタタ製鋼製鐵會社を始めとして全工場數十二工場、就業員總數三萬四千名を有してゐるが、これ等は全部印度政府の保護を受けて發達したものである、石油はビルマの分離以來、その資源の大半を失つたが、アッサムに六千五百萬ガロン、パンジャブに四百四十萬ガロン程の年産がある、こゝに參考にまで印度の鑛産物を數字的に見ると。

印度に於ける鑛産額と世界産出の比較

マンガン鑛 九十六萬噸「世界第一位」

雲	母	八萬六千噸「世界第一位」
鉛	鑛	八萬八千噸「世界第三位」
タングステン		三千五十噸「世界第三位」
クローム鑛		三萬一千噸「世界第四位」
ニッケル鑛		一千二百噸「世界第四位」
亜鉛鑛		五萬五千噸「世界第七位」
鐵鑛		二百七十萬噸「世界第七位」
鹽		百五十三萬噸「世界第七位」
銻鑛		百五十七萬噸「世界第八位」
鋼鑛		九十七萬噸「不明」

となつてゐる。翻てこゝに一般印度の労働能率の問題を書いて置くが、チーフはこの問題に關して種々の角度から觀察して印度の労働者達の悲惨なる生活状態を指摘してゐるが、要するに斯かる貧乏と生活環境に於ては印度の労働者は何等の希望も野心も向上心も喪失してゐるのみならず、非常に肉體的にも疲弊してゐるから非能率的事であることは當然であると云つてゐるが、事實印度の労働者の境遇は農民より遙かに劣悪である、これは印度人の人種的素質や

熱帯的氣候並に社會的慣習等の自然的なる固有的條件の外に、無智と貧困に基くところの人為的及び政治的條件に依るものである、更れはその責任の大半は英國政府にあることは斷言すると共に印度人等は銘記すべきである。

印度は全く英國の搾取の對照として英帝國の寶庫であると云はれてゐるのは印度の地理的の優秀性、天然資源の豊富、人口資源の巨大はそれだけでも英國にとつては非常なる利益となつてゐるが、これと同時に英國資本主義の販賣市場並に原料供給地としては云ふに及ばず、又投資市場としても絶大の價値を有してゐる、これを英國は統治と關連して印度を搾取の目標としてゐる、而して印度の對外貿易に於て英本國の占むる地位を一例として見れば。

年次	輸入	輸出	輸出入合計
大戰前平均	六二%八	二五%一	四〇%〇
大戰中平均	五六%五	三一%一	四一%二
大戰後平均	五七%六	二四%二	三九%五
一九三六年	三一%七	二九%九	三〇%一
一九三七年	三一%〇	三一%四	三二%二

一九三八年 二九%九 三三%三 三二%一
 一九三九年 三〇%五 三四%〇 三二%〇

であつて英本國は對印度貿易に於て前の大戦後は漸次その地位の衰退を來たしてゐるが、尙印度に於ける輸出入の約三分の一を占めて依然他を壓倒してゐる、而してこれを商品別にすると英國からの輸入は機械類、鐵鋼、器具製品及裝具、自動車、金物、羊毛製品、綿製品等の工業品が大部分であるが、印度からの對英輸出は皮革、棉花、黃麻、亞麻仁、羊毛、油糟、鉛等の諸原料が主となつてゐる。かくの如く印度は依然として英國にとつては巨大の販賣市場であると共に缺くべからざる原料品の供給地であることは判明するのである、更に英國の投資市場としての印度を見るに、キングダスレーの調査に依ると、

投資物	投資額	百分比
公債類	二六一「單位百萬磅」	五七%〇
鐵道	九〇	一九%六
鑛山	一四	三%一
公共事業	一一	二%六

其他 八一 一七・七

合計 四五八「單位百萬磅」 一〇〇・〇「一九三〇年」

である。又印度の貿易状況を觀察すると最近に於ける總額は約三十五億留比であり貿易尻は常に出超であるが、この對外貿易の特徴は輸出は農産物を主としてゐる、殊に黃麻、棉花、及び綿製品、茶のみにて全輸出額の過半以上を占めてゐる、輸入は七五%程は加工製品であるが輸出入共に英

國が首位を占めてゐる、即ち三大農産物の輸出状況は。

年度	商品總輸出額、ジニート及同製品、棉花及同製品 茶
一九三七年	「八、七〇」 「100」 「四、八」 「三・六」 「五、六」 「四・九」 「10」 「10・11」
一九三八年	「八、〇九」 「100」 「三、七」 「四・〇」 「三、〇」 「二・六」 「三、四」 「三・五」
一九三九年	「六、元」 「100」 「三、五」 「三・四」 「三、七」 「元・五」 「三、四」 「四・四」

「單位百萬留比、括弧内%」

であり、又對主要各國の貿易比較の百分比は。

一九三七年	輸入三一%〇	英國一三%三	日本八%二	獨逸五%三	米國一九%三
	輸出三一%四	英國一五%〇	日本四%八	獨逸九%九	米國五%四
一九三九年	輸入三〇%五	英國一〇%一	日本八%五	獨逸六%四	米國一六%〇
	輸出三四%〇	英國九%〇	日本五%一	獨逸八%〇	米國六%二

となつてゐる、而してこの印度の産業開發に最も至大なる關係を有する交通運輸方面の問題を觀察すると、結論から先きに云へば鐵道政策の如きは現在の鐵道企業それ自體のみの利益追究から脱却して産業政策的からして産業全體の發達に即應するために改革するの必要があり又道路の如き

れを米國の鋪裝道路六十萬哩、非鋪裝道路二百五十萬哩に比較すると餘りにも彼我の懸隔は甚だしいのである。かやうではあの廣大なる土地に對して道路の貧弱なることは畢竟印度の資源産業開發を遅々たらしむるは當然である、殊に印度の農業の最大弱點は運輸問題にありと云はれてゐるが、全く鐵道は英人の利益のためにのみ運用せられて居る、

夫れ故に貨物の運賃は非常に高率であるが故に農民は鐵道運賃が高いために作物をそれだけ廉價に販賣せざるを得ないことになるのである、更に安價なる船賃を利用する外國品との不公平なる競争を餘儀なくせらるゝのである、理論に合致せない言葉であるが「鐵道の發達は反つて農村の荒地を招いた」とは全く印度に當てはまるのである、現に千九百二十九年から同三十一年に亙つて印度の各港市ではカナダの小麥の方は却つて國産品よりも廉價であつた位である。これは印度國內の鐵道運賃が高率なる結果である、印度は到るところに森林が存在せるにも拘らず鐵道運賃の高率なるがためにこれが輸送は頗る困難を極めて燃料問題にも影響してゐるが、更に肥料の運搬家畜、家畜飼料の輸送等にも多大なる障碍を與へてゐる。

抑も印度に於て始めて鐵道の敷設されたのは、我國の鐵道創設に先立つこと約二十年前の千八百五十三年にボンベイ、カルヤン間の三十二哩であつたが、それから印度の國防的と經濟的重要度の進行に伴つて逐次發達を遂げて現在

では總延長は約四萬三千哩あり、そのうち國有鐵道は三萬一千哩である、又投下資本金は約八十八億留比と云はれてゐるが、その内政府の投下額は七十八億九千萬留比となつてゐる、併乍ら印度鐵道のゲージは頗る不統一なることは標準軌道五呎六吋が二萬一千哩、米軌道は三呎三吋八分の三で一萬六千哩、獨軌道は二呎六吋及二呎が四千哩の三種から成立してゐる、またこれを經營狀態から分類すると、所有管理とも即ち政府に屬する國有國營鐵道は西北鐵道、東ベンガル鐵道、東印度鐵道、大印度半島鐵道等がこれに屬して居る、更に國有民營鐵道たる國有鐵道の經營を會社に委託し政府はこれに利子の保障を與へるものは、孟買、バロダ、中央印度鐵道、マドラス、南マールワツタ鐵道、アツサム、ベンガル鐵道、ベンガル・ナグプール鐵道、南印度鐵道等はこれである、又民有民營、民有國營鐵道はベンガル、北西鐵道以下數多の小鐵道があるが王侯國鐵道はニザム鐵道である。

而しこれ等の諸鐵道の最近に於ける運輸狀態を見ると、

一ケ年の乗客数は約五億前後にして貨物は約八九千萬噸であり、總收入は十億留比となつてゐるがその内經費七億留比を差引くと三億留比程度の利益が擧つてゐる、投下資本に對する割合は大體二%乃至五%の間を上下してゐる、更にこれを政府の鐵道會計について見ると、純收入よりも支拂利息の方が多い場合がある、即ち千九百三十年から三十一年、三十五年三十六年の六ケ年間は毎年四千萬乃至一億留比の歳出超過を計上してゐる、併乍ら千九百三十六年から三十七年度の間には若干の剩餘を生ずるに至り、更にその翌年度から一般會計へ年々二三千萬留比程度の剩餘金の繰入れを行つてゐる、更に戰亂勃發後は貨物運賃の増加によつて、鐵道收益も漸増の狀勢を辿つて千九百四十年二月に印度議會に提出された鐵道豫算によると、千九百三十九年同四十年度の純收入は三億二千五百萬留比、支拂利息八千九百萬留比にして同四十年同四十一年度の純收入は三億七千百萬留比、支拂利息二億八千八百萬留比と見積り差引八千萬留比の剩餘を生ずる見込となつてゐる。

今度は印度の道路を見ると道路網は、カイバルから北部印度を通過してカルカッタに至る所謂大幹線道路の外カルカッタ・マドラス間、マドラス・孟買間、孟買・デリー間の四大幹線を中心として建設されてゐるが、この四大幹線の延長は五千哩に達してゐる、然しこれ等の主要幹線も架橋建設が未だ充分に完成してゐないために印度特有の雨季に入ると屢々部分的に交通杜絶を生じて貨物の道路運送に差支へることは屢々ある、故に印度には未だ完全なる大幹線道路はないと云ふことが出来るのである。全國道路の總延長は約三十二萬三千哩で、その内舗裝及び砂利敷路を含んで八萬二千哩、其他の道路は約二十三萬一千哩であるが、道路の新設修理に投下される資金は一ケ年五千萬留比乃至八千萬留比の見當である、この道路網に深き關係を有する、自動車は印度では千九百三十九年一月現在で十六萬六千餘臺となつてゐる、内十三萬六千臺は英領印度、三萬臺は王侯國にあつて、その内譯は個人乗用車が十一萬三千臺に上つて壓倒的に多く、その他はタキシール六千臺、バス二萬七

千臺、貨物自動車約二萬である。

海運及び河航行に關しては印度に於ては何等見るべきものはないと云つて可なりである、就中海運はこれ迄英國その他外國に依存して居つたために印度自身としては全くの無力である、即ち印度外國貿易の約九十八%までは印度船舶以外の船で運送されてゐる實狀である、印度政府はその海運政策上からカルカッタ、ボンベイ、マドラス、カラチ、チッタゴングの五港を中央政府の管轄下に置いて、特別行政を行つてこれが改善發達を計つてゐるが、他方王侯國に屬する港灣に對しはその設備改善擴張等は許さずして海運上の利益を壟斷すべき政策をとつてゐる。

これが大體印度の資源問題とこれに至大の關係を有する交通問題の全貌であるが、斯くの如く印度は多大の資源に富み恰も天恵豊なる農業的環境にあるに拘らず英國の老獪なる愚民政策……不作爲政策の結果は印度の農村をして世界第一の窮乏農村たらしめたのである、即ち足を一度印度に踏み入れて農民の生活を觀察するとその生活は最も悲惨

を極めて居ることは何人と雖も肯定するところである、彼等印度人の平均所得は人口三人について漸く二人を養ふに足るだけであり、しかもそれは凡ての人々が裸體で歩行し、年中青天井の下に生活して何等の享樂も慰安も持たないで最も粗末なる食物以外に何等も出来ない前提の下に於てである、これを思ふと吾人は同じ東亞民族として英國の過去數世紀に亙る對印度政策は搾取と僞瞞とのみに終始してゐることに多大の義憤を感じるのである、這般ビルマの失陥は重慶政權の苦惱であると共に英國に多大の衝動を興へ、印度の解放へ一歩前進したのであつた、最早や英國の印度に對する權威は全く地に落ち英國軍の實力は如何なるものであるか、又印度統治の真相は如何なるものであるかは漸次暴露して來たのである、英國の僞瞞と威嚇とに潜伏した英國は皇軍ビルマ作戦の神速ぶりに我軍印度攻略の恐怖が今や日に／＼に募つてゐる模様で最近ロンドン外電に依るも。

日本軍はモンスーンの到來までに決定的な戦果を擧げる

ことは今や疑問の餘地なし。

と嘆じて、デーリー、テレグラフの如きは我軍がラングリンからマンダレーに至る四百哩を僅か八週間で進撃したことを驚異と恐怖の念を以つて傳へ、又ナチオナル、ツアイツングのロンドン特派員は。

英國は日本軍の南部印度乃至セイロン島攻略を極度に恐れる、一方ベンガル地方にも銳意兵力を集中しつゝあるといはれる、加ふるに國民會議派がネールの積極的防衛主義を排撃して、ガンヂー一派の非協力非暴力主義に立ち返つたことは英國の不安を一層驅り立てることゝなりこの印度の非暴力消極態度は日本を印度攻略に誘ひこむやうなものだとの危惧をしてゐる。

と報じてゐるが、大東亞印度人代表ビハリ・ポースが。

英國がこの佛教の靈地たるマンダレーから撃退され驅逐されたことは我等印度國民を最も喜ばしめるものである、マンダレーと聞けば我等は直ちにそこにある獄屋を思ひ浮べる、この獄屋に沈黙と苦難を過した幾多の印度

の志士を考へ出さずには居られない。

と英國は卑劣極まる惡劣手段を以つて印度の正義を叫びし幾多の印度志士を苦しめるために、この極めて神聖なる佛教の聖地に英人は獄屋を造つたことを詰り、印度人にとつては我等の指導者が英國のために苦んだ所として、偉人チラクは六ヶ年をこの獄屋に苦しみ、又有名なラージュブツライ・アジツトシングや其の他の志士達ちが此の獄屋で長い間苦んだことを追懷して。

マンダレーは實に印度獨立反英運動のシンボルであり、英國はこれから印度で勢力を守るために無理矢理に印度で血を流させるつもりである。例ひ英國が如何なる肚構があるとしても日本は英國を到るところに撃破滅せねばならぬ立場にある、大東亞から英國の勢力を完全に驅逐することが日本の大東亞聖戰の目的である、併し日本は印度に對しては尊敬と同情とを充分持つてゐる、英國の勢力を驅逐するならば日本は印度へ一步も踏入れないであらう。併し此の好機會に印度が國民としての義務を果

さなければ日本は好まざる英國を撃滅すべく印度へ進入せねばならない何故ならば英國の勢力が依然として印度に存する限り東亞の安定は確立しないからである。

と云つて、ポースはこの際この機會に於いて印度の諸君は英國の印度支配を完全に斷絶するために印度人の一致協力して奮起すべき最好の機會たるを強唱してゐるが、更に彼れば偉人チラクが著述した婆加婆多讚歌の秘密の警告を引用して。

印度建國の大精神として國民へ與へられた聖雄スリー・クリシュナの啓示譜……正義のためにバハラータ民族は奮起して邪道を撃滅せよといふ精神を以つて今日戦ふ大敵は英國である。

と喝破してゐる、思ふに他の國家と國家、他の民族と他の民族を相剋闘はせしめて以つて他の犠牲に於いて自己の安全と繁榮を圖るといふ奸策は英國多年の政策であり、又多年の老獪なる英國のやり口はこれまで幾多の事實が立證されてゐる。これを亦英國は亦印度にも適用せんと欲してゐる。

るが、多年英國の壓制に苦み偽瞞と威嚇に慍伏した印度は前記のやうに廣大豊饒なる國土を持ちながら産業も交通も遅々として發達せずその國民は世界有數の貧困にあゑいであるのは全く英國の非人道主義の結果である、然し今や印度は漸次覺醒しつゝやがては偉大なる蹶起へと推進し來るであらう、と共に大東亞の魂へ回歸するはさう遠き將來ではあるまいと思はれるのである。

今や英帝國崩壞の兆は事實として現はれてゐる、這般東條首相は「予は今日こそ印度民衆が印度人の印度を建設して印度本然の姿の確立のために全力を致すべき絶好の時機である」と述べてゐるが全くその通りである、印度の覺醒は今である、さうして印度が本然の姿に歸つた時はその持つ莫大なる資源は將來交通機關の發達と相俟つて印度人をしてこれまでの悲惨の状態を一變せしめ以て相互的に人類の幸福を齎らすであらう。(五月十五日記)